

国際化のはじまり

太田政幸

過日、ワグナーの「ニュルンベルグの名歌手」という楽劇のビデオを見ながら、進歩、改善することとは、既成の枠にとらわれず、苦痛をともなっても良いものを受入れてゆくことであり、社会の規範を守っていれば除々に良くなるものではないという主張を、靴屋の親方であり詩人でもあるワルターという主役の1人をとうして強く訴えていることに認識を新たにしたところです。作者のワグナーも新しい概念の旗手として知られています。御多分にもれず、当時の社会から食み出した異端者です。

異質のものを取入れ、独自に局面を展開してゆくことで、従来の壁を取り払い、垣根を越えて新しい分野で成果を得、自らの立場を確立することが望まれているのは何も学問、研究の場に限られたことではありません。

日本人は国の予算の語呂合せにはじまり、状況に適した造語が得意で、養殖はまち、新人類等々枚挙にいとみませんが、学際という言葉も生れて久しくなります。最初に耳にした時は新鮮な響きがありましたが、中味がともなわなければ既成概念に押されて色あせた感じがしてくるものです。日本にも古来から科学する心があって、江戸時代には一流の科学者を輩出していますが、西欧（特にドイツ）から近代化のために多くの知識、技術をお上の声がかかりで導入し今日の礎を築いたために、意外に見過されていますが、親方に率いられた職人のような知識技能集団化しがちな傾向まで移入してしまったようです。これは日本古来からの慣習によくなじんで、組織間、個人間のつながり

り、密接な連携プレーを重視する社会に定着している様です。その反面、既成概念の枠組の中でしか事象がとらえられない非常に閉鎖的な社会を築いてきたということも云えます。最近の政府、業界の国際化の度合を見るかぎりにおいて、このことは顕著に表われています。異質なものを排除し続けて出来上った今の日本に個々の価値観で状況を判断せざるを得ない局面も多々あるのも事実だと思われま。しかし、各国の経済がその国の意志だけ運営出来る時代が終り、相合依存が進んだ国際関係の中で、その国の既成概念だけで対応をはかってゆくことはもはや不可能です。日本は歴史的に国家間の相理解と依存という枠組の中で生きてきた経験がないという現実があり、その意味で、日本は国際社会の中で異質な存在だと思われま。

ガット裁定でクロになった農産物の一部を原料とする製品を日本市場で製造販売する米国企業の中からみますと、政府や業界のあまりに現実を無視した「自分勝手な」利益を中心にした言葉ばかりを耳にします。農業問題は国策の中心だといいいながら、戦争を継続するために作られた食管法が罷り通り、過去の戦争の教訓を生かせない老人達が国政の舵取りをし、見識を欠いた言葉で国会を空転させて平気でいることを見れば、国際社会への配慮と、おかれている立場の理解のなさがよく見えます。「ニュルンベルグの名歌手」は、全く別世界に属する聖杯騎士団の騎士が職人の親方組織の一員となり、職人組合は異質の人間を受け入れ、新生ドイツの新しい発展を期待することで幕がおります。現在の日本の状況が、この楽劇の中にだぶって見えたのは考えすぎでしょうか。

日本ワイス株式会社

取締役、技術生産本部 本部長

(昭和40年応用化学科卒 新制15回)